

きむらとしひこ  
木村俊彦

学位の種類 博士(文学)  
学位記番号 文第131号  
学位授与年月日 平成9年10月9日  
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 ダルマキールティにおける認識と宗教的権威  
——インド哲学諸派との対論を通して——

論文審査委員 (主査)  
教授 磯田 熙文 教授 後藤 敏文  
教授 中嶋 隆藏

## 論文内容の要旨

本論文は、7世紀以降のインド哲学諸派とインド・チベット仏教諸論師に多大の影響を与えた、西暦600年頃のインド仏教哲学者・論理学者であるダルマキールティの宗教哲学についての研究である。基本資料は彼の主著『プラマーナ・ヴァールツィカ』の第1章第3段の聖典論と、第2章である宗教章全体とし、その対論者である婆羅門教正統派のミーマーンサー派とヒンドゥー教雄派のパーシュパタ派の体系を対照研究している。

初めに序論の第1章で、ダルマキールティ研究の歴史と潮流を述べて、本論文の課題が現在の学界の desideratum であることを開示した。ダルマキールティ研究の端著は、ビューラーがジャイナ書庫で論理学・認識論綱要書と注釈『ニヤーヤ・ビンドゥ積』を発見したことに始まる。しかし世界の学界にダルマキールティの名と綱要書の体系が知られるようになったのは、20世紀になってベチェルブルグのΦ. II. シチェルバトスコイが、当地の Bibliotheca Buddhica 叢書から綱要書の出版・翻訳・研究会を公刊してからである。

第2期の潮流はネパールのダルマキールティ研究家サーンクリトヤーヤナが、チベット寺院

所有の写本を撮影し、多くの仏教文献と共にそれらを校訂出版した時期に当る。即ち1938年から1960年にかけて主著『プラマーナ・ヴァールツィカ』諸注釈と共に公刊され、また他の論理学関係綱要書もチベット語訳を主資料として、主としてウィーン学派が研究していった。ビューラーの講座であるが、フラウワルナー門下の手に成る業績である。

1980年頃から、ダルマキールティの主著『プラマーナ・ヴァールツィカ』の原典研究がそれぞれの分野で発表されるようになり、第3章・知覚章に続いて第1章・推論章も前半頃まで主として日本人学者がとり組んだ。この第3期に木村は、第2章・宗教章を研究した。今回、第1章の後半を占める聖典論本偈の原典解釈と合わせ、ダルマキールティに先行して論駁されたミーマーンサー派とパーシュパタ派の対照を加えて博士論文とした。

序論の第2章で、ダルマキールティ年代論を扱った。詩劇『ヴァーサヴァダッター』に、他の哲学者と並んでダルマキールティが比喻に援用されている事を考証して、作者スバンドゥの年代より遡上し、私淑した仏教論理学者ディグナーガとその影響下のニヤーヤ学派のウッディヨータカラとミーマーンサー派のクマーリラの後であるという極めて限定された年代、c. 550～620年という結論を得た。更にダルマパーラがダルマキールティを援引し、チャンドラキールティがダルマパーラと同年代であることを論証した。彼らは玄奘以前の年代から、ダルマキールティの同時代の後輩となる。ディグナーガの年代をフラウワルナー説に従った後は、ダルマキールティ、ダルマパーラ、チャンドラキールティの年代について新しい知見を学界に提示した。序論を借用して年代を論じたのは、本論にその場所がなかったからである。

第3章は、詩人としても著名であったダルマキールティの詩から、人物誌に資する12篇を訳出して考察した。叙情詩であるから史料にはならなかったが、生前から書物が非難されていたこと、自らの精進を秘やかに修めていたこと、さりながら自己の体系と著作には並々ならぬ自負を覚えていたことなどを看取できた。何よりも詩人ダルマキールティの面目を取り上げたこと自体、学界で珍しい興味深い仕事になった。そこで「仏教々団を莊嚴する」というスバンドゥの筆がダルマキールティを指したものとすわれわれの年代論的な根拠も「詩人ダルマキールティ」の把握と係わっており、序論の第3章ではこの方面を分析した所以である。「莊嚴 alāṅkāraḥ）」という言葉を巡って学界に長らくの混乱があった。

これまでのダルマキールティ年代は、単に玄奘が『大唐西域記』等で沈黙していることのみから、7世紀半ばとして扱われてきたが、われわれはスバンドゥの年代をその序詩の記述によって、彼がヤショーダルマン王の宮廷詩人であつ西暦583年の死後3人のマーラヴァ国支配者を経験しているとして、西暦555～625年頃の生存と見、ダルマキールティはディグナーガやその影響を受けたクマーリラとウッディヨータカラに挟まれる狭い年代のc. 550～620年と設定したのである。この傍証は、ダルマパーラ及びチャンドラキールティという二人の仏教哲学者がダ

ルマキールティと同時代であるという新知見からも得ている。この二者の年代も付随的に本論文の筆者が学界に提供し得たものである。

我々が見たダルマキールティの詩は、仏教転向時の青年時代と見られるものから、諦念を籠めた遺偈のごときものまでであるが、スバンドゥが言う「仏教々団を莊嚴（しょうごん）する」という詩は、チベット語訳にのみ残る「涅槃賛」が典型的であって、非公式な「国際ダルマキールティ学界を主宰するウィーン大学の E. シュタインケルナー博士がドイツ語に重訳している。叙情的なこれらの詩の中にも、ヒンドゥー神学否定等のダルマキールティ哲学が散見され、作者についての同定の躊躇の学界傾向も、筆者の研究結果から払拭できた。

さて本論は第1篇と第2篇に分れる。第1編は聖典についての婆羅門教との論争を通してダルマキールティが築いた認識所依についての哲学体系を、認識論と聖典論から理解するものである。聖典論は自ずから第2篇のテーマになる宗教的権威についての議論と密接に関連する。そこで第1篇の第1章は、ダルマキールティが聖典論の対論者であったクマーリラの所属するミーマーンサー学派の宗教的な認識論を取り上げて、ヴェーダ聖典が彼らにとって最勝の認識根拠となる所以を報告する。婆羅門教の最も伝統的なこの派の根本テキストである『ミーマーンサー・スートラ』の初頭において、ヴェーダ祭祀の福利を認識させるものはヴェーダの教令以外にないことを論じている。なぜなら未来の果報を知らしめる認識根拠は直観ではなく、永遠の言葉つまり啓示であるヴェーダの教令以外にないことを言う。つまり信仰の上に築かれた福音的認識根拠を神学的に措定している。

注解者のシャバラスヴァーミンはこれを、ヴェーダの非人為性、つまり作者が存在しない啓示聖典論にまとめた。ミーマーンサー派中興の祖であるクマーリラは、浩瀚な『シュローカ・ヴァールツィカ』において、人間の著作が誤謬を含み、ゆえに非人為的なヴェーダが無謬であると弁論した。ことにブッダの聖典が人間の言葉ゆえに誤謬ありと論難したことから、第3章で見たようにダルマキールティの反論が始まった。『ミーマーンサー・スートラ』に対するシャバラスヴァーミンの注釈では、次の第2章で見るヨーガ行派の存在論である唯心論に対するミーマーンサー派の存在論としての外境実有・心識無常説を開陳している。次にクマーリラの評釈書『シュローカ・ヴァールツィカ』の構成を第2節で調べて、『ミーマーンサー・スートラ』疏の初めの宗教的認識論に対応するテーマを1514個（3028行）の膨大な議論に充てたことを言った後、特に彼の術語としての「自証性 (svataḥprāmāṇyam)」について注意した。ヴェーダの真理性は他の認識根拠で保証されるものではなく、つまり直観でも理解できず論理実証もできないという啓示論的宗教的認識論に工夫したことを見た。対置的にダルマキールティは、宗教的権威性を直観と論理で検証すべきものと主張したからである。

またクマーリラとは敵対する学派になったプラバーカラミシュラとその注釈者の系統につい

て第3節で見て、特にそれがヨーガ行派の唯心論哲学に対抗する目的意識を持っていたことを見た。このグル派のシャーリカナータミシュラになると、ヨーガ行派の代表者にダルマキールティを設定して、彼の偈を引用し論駁していることを見た。他方、ダルマキールティは、小乗仏教の経量部的哲学と大乘仏教のヨーガ行派的哲学を重層して体系化していることは、第2章で見る。

彼の重層性は総合仏教学派と呼ぶべきものがある。論理学はディグナーガの成果を受容して更に工夫し、その上に仏教各派の存在論を認識論の上に整備し直した。第1節では、実在のメルクマールとしてダルマキールティが強調した対象の効果的作用（arthakriyā）能力ということ、説一切有部の時間論における「現在」の定義——実有の作用性——と『ニヤーヤ・パーシュヤ』で言う特定対象の作用性——概念的対象は働きがない——の両方から受容して発展させた哲学であることを注意した。前者はヴァスバンドゥの『アビダルマ・コーシャ』から採ったもの、経量部的なヴァスバンドゥもこの有部説を良しとしていた。またヴァーツスヤーヤナの『ニヤーヤ・パーシュヤ』は婆羅門教の論理学ながらダルマキールティの必読書であつたらしく、他にも語句を踏まえた所がある。例えばヴェーダの教令の典型としてダルマキールティがよく挙げる「天を望む者は祭祀せよ（svargakāmaḥ yajeta）」も、ウパニシャッドからというよりこの書の引用かも知れない、とした。

第2節では経量部（以下「経部」と略称）の哲学をダルマキールティがどのように認識論として発展させたかを見た。一体、経部は有部（説一切有部）の革新派で、実定性のある教団ではないが、哲学的には有部より整備したものを持っていた。研究者はヴァスバンドゥをもこの系譜に入れたが、その『アビダルマ・コーシャ』をよく読んだダルマキールティも今やその系譜の流れを汲む者になっている。

第2節で経部的な認識論とダルマキールティへの展開を見た。この派の呼称は、有部のアビダルマ解釈学に依らず直接、經典に依拠するという意味だった。ダルマキールティも直接に原始經典〔アーガマ〕を典拠としてブッダの論理性と救済者性を弁証しており、その意味でもこの派の精神を踏まえている。金倉圓照博士がヴェーダーンダ文献の伝える経部説を報告されたように、この派は直観の対象を眼などの感官と同刹那〔同時〕の対象の次の刹那を対象にしていると考え、（丁度、観察中の星が実は何年も前の姿である様に）直観は実在〔現在〕の対象を知覚できないと主張した。直観の刹那に続く刹那に起る判断知が、わずかに外部世界の存在を推知させるのだと言った。

ダルマキールティは、直観対象の実在性を、初めに言った対象の効果的作用能力から検証できるとした新しい存在論を設定したが、判断知については言語表現と結び付くゆえに直観ではないとしながら、単に過去の認識の想起に依拠する誤認でもなく、世俗的には一定の真理性が

ある (prāmāṇyam vyavahāreṇa) と規定している (本論第 2 篇第 2 章で見る) ことに言葉の問題と関連して、却って重要な認識作用である。判断知に準じて言語表現にも、全く真実に基づかない表現と実際の対象に基づくもの、及び両者の中間または混淆したものととする。直観は判断や言葉を含まないとした先蹤ディグナーガの規定があった為に、ダルマキールティの筆致はこれを巡って逡巡があるように見受けられるが、ニヤーヤ学派からは明瞭に経量部 (Sautrāntikāḥ) とされるダルモータラは、『ニヤーヤ・ビンドゥ積』で直観の章の巻末にとくにこのことを付記して、「有分別知覚 (savikalpaka-pratyakṣam)」ということを描定している。

ダルマキールティは経部的認識論で終わるのではなく、ディグナーガの立場であった唯心論的な認識論、即ち認識対象と認識作用と認識結果は一心の展開であるという哲学体系も吐露する。その場合、認識結果は感情などの自証知 (svasaṃvedanam) と呼ぶ心理と同次元であるとし、例えば青い物を「美しい」という感情と共に「青い」と判断することを言う。認識を一心の展開とするゆえ、自証知は認識の結果であると共に発動する原因でもあるとダルマキールティは言う。われわれがこの立場を唯識派という伝統的呼称で呼ばないのは、彼の哲学が一心の展開という段階に留まらず、対象が空だから認識する心も空だという古いヨーガ行派的空の立場にもダルマキールティは進むからだ。これは主著『プラマーナ・ヴァールツィカ』の知覚章で論じているが、宗教章 [プラマーナ・シッディ章] でも、心の本来空にして清らかなことを言明して、般若経の人間観を援引している。これら二つの思潮はダルマキールティにとって二律背反ではなく、より高い次元では空になるという発想で扱う。実際の論調は、第 2 篇で見るように経部的輪廻説や原始經典 (āgamaḥ) の論理援用など経量部に軸足を置いている。

第 4 節では、判断と言葉の認識論を見る。ダルマキールティにとって言葉は話者の意思を伝える機能を評価され、その意味論は社会的約契 (saṅketāḥ) に基づくという。即ち婆羅門教最右翼のミーマーンサー派が主張する意味論である永遠にして本質的な語義という有りようを否定する。その実際の長い議論は第 3 章で逐語的に見るが、ここでは判断と言葉の表象を、否定 [アポーハ=エポケー] 的に浮かべるというディグナーガからの哲学を展開する。即ち対象を「非牛の否定=牛という概念」という操作で、否定的に把握するのが判断であると言う。対象自体を肯定的に把握できない時に、次善の策として [世俗的に] 認識するとされ、直観より低いと見ることカントの悟性論とは対照的であるが、論理はこの認識の上に築かれるのであるから、重要な認識論になっている。これは婆羅門教の啓示論的言語論に対峙する仏教言語論の基礎になっているが、そこでは、真理の言葉は正しい認識の人間によってのみ可能である、非人為的な言葉があるなら、それは人間には理解されないものであると、ダルマキールティは反駁する。

第 3 章で、ダルマキールティの主著『プラマーナ・ヴァールツィカ』第 1 章 [推論章] の

後段の聖典論を逐語解釈と研究に充て、ブッダの宗教的権威の弁証の一環を把握する。その内容に従って6節を用意し、テーマに沿って科段した。第1節は言語概観と仏教聖典の真理性を措定している。この言語論は先行するアポーハ論的言語論の総括部分に当る。真実の対象を基礎に持つ言葉は、サーンクヤ派の「原質 (pradhānam)」とか世間で言う「妖精 [ウルヴァシー]」といった虚言と区別される。ブッダの言葉は、認識論的に無矛盾性のものと定義され、その所以は苦の原理、苦の原因の原理、苦滅の原理、苦滅に到る道 (mārgaḥ) の原理という4つの聖原理 (catvāry āryasatyāni) に求められる。これらは有部や経部の瞑想原理になっていて、ダルマキールティはこれを仏説の根本である救済原理として再編した。第2篇で見る主著宗教章の宗教的権威の弁証でもその根拠にされている。

第2節で、ミーマーンサー派の論敵クマーリラの『シュローカ・ヴァールッテイカ』での啓示論を批判する。総じてヴェーダの内容は認識論的に根拠付けられないと言うのである。彼らは、福音を信ずる以外にない、或いは信ずる者のみ救われるという宗教的認識論に拠っていたが、ダルマキールティはそれらの言葉に基礎がない〔「天国 (svargaḥ)」のように対象を持たない〕ということ、内容が無意味である〔例えば<火は冷気を防ぐもの>という『タイッティリーヤ・サンヒター』のトートロジーなど〕といった根拠から論駁する。

第3節で文法学派の言語論を論駁する。ヴェーダ言語の分析から出た文法学派は、その真理性を言霊 (ことだま) 的なスポータ説によって付与しようとした。ダルマキールティはそのような形而上的言語論では、意味の種々性や変動性といった現象を説明できないと反駁した。何より仏教的な刹那滅の存在論では言葉も無常な音声を本質とするものに過ぎない。仏教聖典は語録という性格を持つ。言葉は社会的約契という人間的な現象のゆえに、これらの言語現象があるとダルマキールティは見る。パーニニによって集大成されたサンスクリット文法学は、更にバルトリハリの『ヴァークヤ・パディーヤ』でブラフマン説と合して形而上学にまとめられたが、ダルマキールティは情報伝達に資する言葉の機能とそぐわないと反論している。

第4節で刹那滅説からの言語無常論を吐き、第5節で、「真言=マントラ」と呼ばれる祈禱句一般もその効用はマントラ作者の知や修行力による謂ゆる加持力 (adhiṣṭhānam) からくるもので、やはり人間の力に依るという説明をしている。ダルマキールティの頃にタントリズムが勃興して、ヒンドゥー教からジャイナ教や仏教にも拡がりを見せ始めたのだが、ダルマキールティは「辺地の呪術医法」まで例示して、霊的な言葉にも作者が居るという事実を開示したものである。これは初期のタントリズムを反映した説明で、その史料としても興味深い。

第6節で、ヴェーダ聖典批判の総括を見る。昇天という未来の福利は超感官的对象であって、人間による認識の外にある。聖典 (āgamaḥ) とは、正しい認識と違背しない言葉であると定義し、人間の認識理性の対象外のヴェーダの教令については真とも偽とも判定できないと。か

くてクマーリラの〈自証性〉という聖典論に対して、ダルマキールティは認識論に基礎付けられた権威性を聖典にもとめる。その場合聖典は言葉であり、言葉は論理と結び付くのであるから、論理的明証性が聖典のメルクマールにならなければならないとして、主著宗教章で敷衍する。

本論第2篇はこの『プラマーナ・ヴァールuttiカ』第2章を逐語解釈して、ダルマキールティによるブッダ（彼は「世尊 (bhagavān)」と呼ぶ）の宗教的権威 (pramāṇam) 性の弁証を把握する。論理学的問題点については結論の部で述べる。

宗教的権威の対論はミーマーンサー派のヴェーダ論であると共に（ここでは面白いことに神〔諸天 (devāḥ)〕より聖典と祭祀が重要なのである）、ヒンドゥー教パーシュパタ派の神学である。ことにこの宗派がニヤーヤ論理学派と結びついて神の証明 (īśvara-siddhiḥ) を種々試みたから、仏教論理学者ダルマキールティの論駁する所となった。そこで第1章でパーシュパタ派の実践論（第2節）や神学的人間学（第3節）、および神の証明（第4節）について論じた。第2、3節の資料は根本経典『パーシュパタ・スートラ』とカウンディニヤの註釈『パンチャールタ・パーシュヤ』であるが、第4節ではニヤーヤ学派中興の祖ウッディヨータカラの『ニヤーヤ・ヴァールuttiカ』を中心に、8世紀の『タットヴァ・サングラハ』（シャーンタラクシタ著）とカマラシーラ註に引用される他のニヤーヤ学者の断簡からもディグナーガ後ダルマキールティまでのニヤーヤ学派の証明を見る。

彼らの神の証明は、形あるものがすべて作者の造作であることを根拠にして、山・川等も全知全能の神〔シヴァ〕を作者に持つといった論理をとる。インドの論証パターンは主張命題を先に言明し、続いて論拠を開示するが、論理的にはアリストテレスの演繹〔三段論法〕と同じ集合的計算になる。「(大前提) 形あるものは作者を持つ。(小前提) 山・川等は形あるものなり。(結論) ゆえに山・川等は作者を持つ、」というもの。しかしこの証明は、人間の工作に由る形あるものと自然世界を故意に弁別しない表現で、仏教側は後者の作者を認めない。従って広く承認される集合計算になっていない。このことをダルマキールティは、前提遍充 (vyāptiḥ) の疑問なる論証式として批判した。論証の基礎に厳密な言葉の用法を要求したのである。ダルマキールティ後の後期仏教論理学派では、神の証明の批判が重要なテーマの一つになった。それらはダルマキールティに依っている。

主著『プラマーナ・ヴァールuttiカ』第2章は、この批判を含めた宗教的権威性の議論を進め、その中でブッダを、苦等4つの原理の提唱ゆえに人類救済の師としての宗教的権威ありと弁証する。即ち本論第2篇の第2章「ダルマキールティのプラマーナ論」は、その弁証を含む初め33偈〔シュローカ=32字の2行詩〕を解説したが、この中に先述の経量部的認識論も開示されている。なぜなら「権威」を意味する “pramāṇam” には「認識根拠」の意味もある。

ディグナーガの『プラマーナ・サムッチャヤ』は「認識論集成」の意味だった。ダルマキールティはその評釈として『プラマーナ・ヴァールuttiカ』と題したが、この章を「プラマーナ・シッディ〔証明〕」と名付けたのは、ブッダを宗教的権威として証明する、との意味である。その弁証は第3章で見るが、根拠は二途に分れる。章末で言う、ブッダの悟りの直観と教説〔言明〕論理の卓抜さである。

悟りの内容は苦等4つの原理で開示されているとして、主著宗教章の後半を費やして、苦・集・滅・道の4つの原理をテーマにした評釈が展開する。これはディグナーガの書の範疇を全く越えたダルマキールティの実践理論になっており、本篇の第4章で逐語解釈し、研究した。彼の議論は常に他宗派の哲学や実践の批判を伴っているので、ダルマキールティを研究することはインド哲学史をひもとくことに等しいとシチェルバトスコイは言う。つまり仏教内諸思潮はダルマキールティにおいては総合化と論理的強化の対象に過ぎなくなっている。大寺院や大教団で教学に励んだのではなく、婆羅門教から転向後も絶えず他宗派との切磋琢磨のうちに精進したらしい孤高の生涯をわれわれは彼の叙情詩からも汲み取っている。

彼の実践的倫理学は、輪廻の要因を業と煩惱 (kleśāḥ) に依るとし、諸煩惱の根本を、自我意識とするものである。それまでの伝統的な煩惱羅列に代えて、因果関係を明瞭にして、煩惱の払拭を無我観という根本実践に求めることができた。苦は本能的自我意識から喜悦を求める煩惱に由来するとし、解説〔苦滅〕の道は無我観の実践としたのである。対照的な他宗派の実践について、ジャイナの苦行は靈我 (jīvaḥ) を立てたままの無意味な行であるとし、ミーマーンサー派の祭祀主義は人間的倫理と関わりなく昇天と至福があると考える矛盾を批判する。サーンクヤ派の靈・肉二元論は靈魂を立てることで解脱は不可能であると、彼は指摘する。無我の実践は、認識論の中でヨーガ者の知覚というテーマの中にも組みこまれる。瞑想対象を苦・空・無常・無我等の16相とする伝統的な体系を、知覚論の中で認識論化して説いているからである。

「結論」においてダルマキールティの如上の体系をまとめて報告したが、ただその上で「証明」と彼が言っている内容の論理的批判も、問題点として付言した。それはブッダの宗教的権威性 (pramāṇabhūtatvam) を、ブッダの大悲の精神ないし救済の事業から推知せしめようとする主著宗教章の論理についてである。ダルマキールティ自身が論理学の規則を証因と所証の遍充問題として〔アリストテレスの大前提・小前提の如くに〕、厳密に法則化したにも拘らず、「大悲」ないし「救済」の推論根拠は集合論的にはブッダの個体を越える集合的な概念ではないから、集合論における推論としての  $p \cdot q \rightarrow r$ 、 $p \cdot q$ 、 $\therefore r$ 、という推論にはなっていない。それは評釈としてのプラマーナ・シッディ章が先蹤ディグナーガの『プラマーナ・サムッチャヤ』序詩〔礼拝偈〕に付された説明をなぞった形になっているからである。従って内包上の意義論的な定立 (siddhiḥ) と見る以外に解釈できない。ただダルマキールティの議論

の過程は論理的であろうとする努力に満ちていた。

本論文の末尾に、基礎資料とその略記号の一覧表を掲載した。インドからのサンスクリット原典の出版が揃って約40年、わが国に金倉圓照博士がウィーンの花ラウフルナー博士の業績を紹介してから半世紀を閲したが、今ではウィーン大学のシュタインケルナー教授を中心に非公式な「国際ダルマキールティ学会」を形成するまでに至っている。その流れは序論の第1章で述べた如くで、本論文はその中に位置付けられる。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、インドにおける認識論・論理学を大成し、その後の宗教哲学に大きな影響を及ぼしたダルマキールティ（法称、6／7世紀）の主著『プラマーナ・ヴァールティカ（知識論評釈）』のうちの「スワールタ・アヌマーナ（推知）章」後半、及び「プラマーナ・シッディ（宗教的権威の定立章）」を直接資料として、彼の宗教観を明らかにしようとしたものである。序論（第1－第3章）、本論（第1篇第1－第3章、第2篇第1－第4章）、結論からなる。

序論、ダルマキールティに関する研究史（通常、3期に分けられる）を踏まえ、本研究をその第3期のうちに位置づけてその研究方法と課題を提示する。即ち梵文原典、チベット語訳などの文献研究を踏襲すると共に、従来の研究が認識論・論理学に関する分野を中心に進められてきたのに対して、ダルマキールティの宗教者としての面を解明することに力点を置こうとするのである（第1－2章）。次いで、彼の年代論に関して、これまでに用いられ言及されてきた諸資料を再吟味しつつ、有力な7世紀（600－660年）説に対して、6世紀後半（c. 550－620年）説を探ろうとしている。

本論、第1篇第1章。正当的なパラモン教学の担い手たることを自負するミーマーンサー派が“ヴェーダの教令（codanā）の言葉は非人為的な啓示であるが故に真理であり、未来の果報を保証する”とし、また“超感官的な世界も含めて外界が実在する”と主張するのに対して、ダルマキールティは、“世俗的な日常の認識主体、認識の場にあっては外的世界が虚妄であり、また言葉を飽く迄も人為的なもの、生起する故に無常なもの”とする佛教の立ち場を鮮明にしているとして、両者が鋭く対立する点を明らかにしている。

第1篇第2章。ダルマキールティの認識論の特徴を、経量部（推知によって、日常世間的な外界の現在一刹那の実在を主張する）と瑜伽行唯識派（無我論に基づいて外界の非実在を主張し、自己認識の理論を立てる）の両種認識論を踏まえた重層的な立場を取るところにあるとし、宗教的には対象と認識主体を非実在（人・法二空）とする立場に立つことを確認している。

第1篇第3章。『知識論評釈』「スワールタ・アヌマーナ章」後半の和訳解説を通して、ブッダの言葉の信頼性の根拠を四諦説に求め、ヴェーダ哲学（クマーリラ『シュローカ・ヴァールティカ』の啓示論）とその常住なる音声語の顕現（スポータ）説の批判などを詳しく取り上げている。

第2篇第1章。ダルマキールティが神の存在証明に関して論難する相手はニヤーヤ（正理）派のウドヨータカラ（6世紀）であるが、論者は、ウドヨータカラが自身を“パーシュパタ（獣主、シヴァ派の一）派の師”と表明していることに注目し、彼がサーンクヤ（数論）派の *puruṣa*（精神、非作者）・*pradhāna*（非精神、世界原因）の二元論に基づく世界を批判し、“日常経験に照らして精神（知ある者）が世界を主宰する（動かす）、即ちそれは一切智者・神（*īśvara*）である”と主張するのに対して、ダルマキールティは、“知ある者という表現に、日常の人間の行為を越えた経験外の神の作業までも含めるのは範囲が広すぎるといふ誤謬を犯している”とし、また“常住不変の神に創造を帰することはできず、刹那的存在のみが有効な作用能力（*arthakriyāśakti*）を持つ実在である”とする等の主張によって批判したことを明らかにしている。また、この刹那的実在・作用論に基づく、主宰神の否定と反否定の熾烈な議論がその後の学僧達により重要な課題の1つとして交わされていくことをも指摘する。

第2篇第2－4章は、「プラマーナ・シッディ章」全体を和訳解説し、本章がブッダの宗教的權威の定立を目的とすることを明らかにする。そもそも本章は、インドにおける論証学を認識論・論理学として発展せしめた、瑜伽行唯識派のディグナーガ（陳那、5－6世紀）の名著『プラマーナ・サムッチャヤ（集量論）』の序（帰敬）偈を解説するという形態をとり、序偈に挙げられるブッダ（*Bhagavat*、世尊）の5つの称号（*pramāṇa-bhūta* 宗教的權威、*jagaddhitaiṣin* 世の利益を楽う方、*sāstā* 教師、*sugata* 善逝、*tāyin* 救世者）を解説し、殊に *tāyin* に関して、苦・集・滅・道の四諦（16行相）、有我に執着する煩惱（有身見、*satkāyadrṣṭi*, *sattva-darśana*）の断滅によって悟りを得るといふ修道・実践論を開示しているとする。論者がこの章を〈宗教章〉と呼ぶ所以である。

結論。これまでの所論を要約し、最後にダルマキールティは「プラマーナ・シッディ章」においてブッダの權威性を大慈悲・利他行より推知せしめて、宗教的な意義の上から定位しようとし、かつそれを四諦の真理に基づいて無我觀の修行として教示した点にダルマキールティの宗教者としての実像があると指摘している。

論者は、「プラマーナ・シッディ章」の翻訳・解説のためにデーベントラブッディ（7世紀）、プラジュニャーカラグプタ（8－9世紀）、マノーラタナンディン（10－13/11世紀？）の諸註釈を用いているが、その手続きと用い方において、なお周到な配慮が望まれる。しかし、難解な本評釈の、これまで全章にわたる現代語訳の公表されていない「プラマーナ・シッディ章」

を、パーシュパタ派神学などの諸対論者の教理をも敷衍的に解説しつつ全訳し、また従来のダルマキールティの年代論に対する再吟味などの基礎研究を積み重ねて、彼の全体像の解明に一歩を進めた功績は大きい。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。